

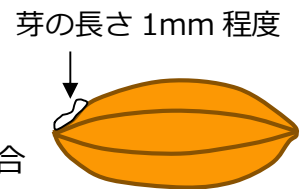
健苗育成の決め手は、苗の生育・天候に合わせた管理！
天気の変動にも注意！

東北地方1か月予報（仙台管区気象台 3/30 公表）
向こう1か月（4/1～4/30）の気温 **高い確率70%**

健苗育成は移植後の初期生育を確保するための必須条件

1 催芽～播種

- ①うるち品種の催芽の目安は、30～32℃で20時間程度です。
- ②芽の長さは1mm程度にします（はとむね状態）。これより長いと播種に支障が生じるので、伸ばしすぎないようにしましょう。
- ③はと胸状態の芽が90%程度まで揃ったら催芽終了です。
- ④覆土の厚さは、床土使用の場合5～7mm程度（育苗マット使用の場合は10mm程度）にします。覆土が厚すぎると出芽の揃いが悪くなり、床土が薄すぎると保水力が低下するので注意しましょう。
- ⑤播種時、床土や育苗マットには十分に灌水しましょう。



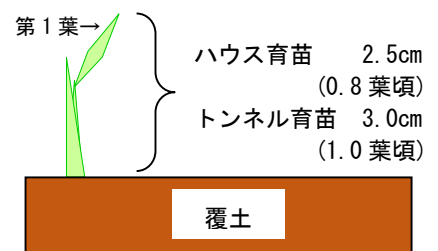
〈図1〉

2 置床後の管理（無加温出芽の場合）

出芽期

出芽を順調にするために、置床の2～3日前からハウスやトンネルを閉めて苗床の地温を高めておきましょう。

- ①温度管理の目安は**昼夜30～32℃**です。
- ②被覆資材を剥ぐタイミングは図2のとおりです。苗の軟弱徒長を回避するため、被覆資材は遅れずに剥がしましょう。
- ③出芽までに時間がかかると育苗障害が発生しやすくなるので、気温が低い日はハウスやトンネル内の保温に心がけましょう。



〈図2〉

緑化期：～1.0葉期

- ①温度管理の目安は**昼間25℃夜間15℃**です。
- ②強い日射が当たらないように被覆資材等を活用し、2日程度かけて徐々に緑化します。

硬化期：1.5葉期～

- ①温度管理の目安は**昼間15～20℃夜間8℃以上**です。晴れた日は朝8時までにハウス・トンネルを開放しましょう。
- ②ハウスやトンネル内の気温は高くなりやすいので、大きく開放しましょう。それでも気温が高くなる場合は、ハウスを被覆できる遮光資材を活用しましょう。ただし、遮光資材を掛けっぱなしにすると苗が軟弱になってしまうので、天気に合わせて掛け・剥ぎしましょう。
- ③灌水は、朝（地温が低いうち）に1回、十分な量を施します。

高密度播種の注意点

高密度播種（乾粃250～300g程度/箱）を行う方が増えていますが、健苗に育てるために、次の点に十分注意しましょう。

- ①厚播きなので苗が徒長しやすい⇒**温度管理には稚苗育苗以上に気を配る**
- ②1箱の苗数が多いので吸水・蒸散も多い⇒**灌水は箱の底まで浸みこむようにタップリと**
- ③慣行育苗より苗の生育停滞・老化が早い⇒**必ず苗が老化する前に移植する**
(育苗日数は稚苗育苗より5～10日短い播種～移植は計画的に)

本田準備：異常気象に備えた土壌環境の改善

3 乾土効果の促進

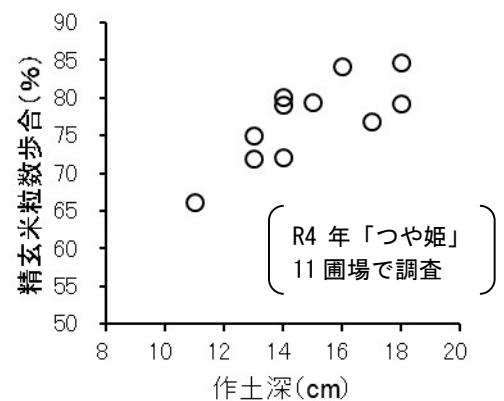
耕起終了から代かき開始までの間、作土の乾燥が進むほど**乾土効果**※が高まり、イネの初期生育が確保しやすくなります。早目に耕起を行い、乾土効果を促進しましょう。

(※作土の乾燥により土壌中の有機態窒素の無機化が促進されること。)

4 十分な作土深を確保しよう

根域拡大・根の活力維持、土壌の養分保持力の増強のためには、十分な作土深が必要です。また作土深が深いほど、精玄米粒数歩合が高まります(図3)。

作土深は15cm程度を目標とし、耕起作業は時間をかけて深めに行いましょう。



<図3>

5 堆肥や土づくり資材を施用しよう

低温・日照不足等の異常気象に遭遇しても、堆肥または土づくり資材を施用していれば、稲体生育へのダメージを軽減することができます(表1)。

また、例年収量や品質が思わしくない圃場では積極的に施用しましょう。

<表1> 土づくり資材施用の有無による収量の比較

	(kg/10a)		
	20年間の平均収量	冷害年の収量	高温・少照年の収量
慣行ほ場	644	563	601
ようりんケイカル連用ほ場	671 (+27kg)	604 (+41kg)	644 (+43kg)

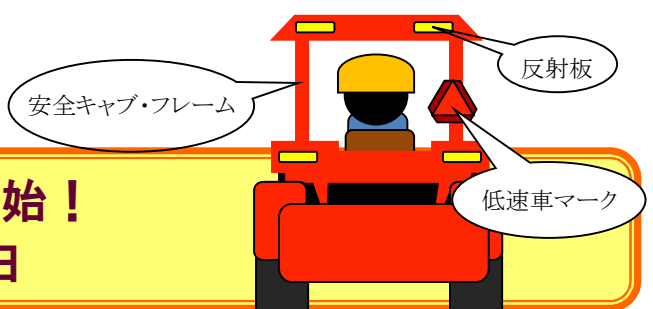
(1981年連用開始、農業総合研究センター)

堆肥施用の効果

- ①土壌の膨軟化（通気性、保水性など向上）
- ②地力窒素や土壌養分の富化

土づくり資材（ケイ酸やアルカリ成分を含むもの）施用の効果

- ①土壌 pH を適正範囲 5.5～6.0 に近づける
(土壌 pH 改善→土壌微生物の有機物分解促進→ワキ防止)
- ②受光態勢の向上、光合成能力の向上
- ③いもち病の耐性向上



春季農作業事故防止運動開始！

4月10日～6月10日